

お忙しくても、約 2 分間で読めます

ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

企業は先ず社会の要請に応えること 郷原 信郎 (桐蔭横浜大学 コンプライアンスセンター長)

1. コンプライアンスは「法令順守」と訳されるが、そうした狭いとらえ方こそ問題がある。法律と社会の実態が合致していればよいが、必ずしもそうではない。法律さえ守っていれば何をやっても許されるわけではないのだ。だが、コンプライアンスの本質は社会の要請に応えることだ。企業は社会のニーズに応えることによって存在を認められ、利益を上げることができる。コンプライアンスと経営とは本来、一体であるべきなのだ。
2. 急激な環境変化の中で、経営者が的確な判断を下すことがますます困難になっている。だが、経営者は逃げてはならない。環境変化を認識し、リスクに向き合い、そのリスクを適切に開示することが求められている。それが日本版 S O X 法の趣旨だ。
3. 不祥事が発生しないための体制づくりは当然だが、いくら努力してもリスクはゼロにはならない。不祥事が起った場合に、いかに対応するかも大切だ。特に老舗企業やブランド価値が高い企業ほど、社会の変化に即応できない傾向がある。
(参考:「週刊東洋経済」2008年6月14日号)

経営者のための危機管理

ひらめきと勘では活力を失う

安部 修仁 (吉野家ホールディングス社長)

1. 外食に限った話ではないのかもしれないが、理よりも恣意で判断を下す傾向が外食業界は極めて強いと感じている。特に創業オーナーにはありがちだ。「ひらめき」と「勘」でトップダウンで物事を決めていく。経営トップのエネルギーで社員を引っばるのは大事だが、それだけではいつしかトップに任せる習慣が組織に根づいてしまう。会社とはそういうものだ。
2. 中間管理職は問題を認識してブツブツ言うものの、表立って問題提起も議論もしなくなる。社員のモチベーションが下がっていき、企業としての活力が失われていく。業績を立て直すには、「合理性」と「有効性」を基準に判断する風土を社内に作り上げていくことが大事だ。

(参考:「日経ビジネス」:2008年5月12日号)

海外事情

国内の空の旅ますます窮屈に (米国)

1. 燃料費高騰に悩む米航空業界では、現在多くの航空会社では米国内線で預け荷物への課金制度を導入しているが、今度は機内映画の上映を取りやめる。USエアウェイズは、今年11月に機内エンターテインメントシステムを廃止し、年間1000万ドル削減する予定だ。
2. 同社によると、映画上映システムは重量が1台あたり約225キロあり、そのため余分な燃料費がかかっている。ただし、フライト時間が長い国際線では映画上映を継続する。飲み物や軽食の有料化、預け荷物の有料化、そして映画の廃止。シートは小型化、軽量化が進んでおり、アメリカ国内の空の旅はますます窮屈なものになりそうだ。
(参考:「WEDGE」2008年9月号)

(参考:「WEDGE」2008年9月号)

古典に学ぶ

才性に短長あり

「人は当に自ら己が才性に短長あるを知るべし」
まさ みずか おのれ さいせい

(訳) 人は当然のこととして、自分の才能や性質に短所長所のあることを知っておくべきである。

(参考:佐藤一斎「言志四録」): PHP文庫